

水辺の竹林とどう付き合っていくか 一級河川木津川での挑戦「竹蛇籠製作プロジェクト」

小林慧人・北野大輔・橋口峻也・山村武正(淀川管内木津川グループ河川レンジャー)

はじめに

水辺の竹林はもともと人に植えられ、維持管理されてきたものである。しかし、時代の流れとともに、これら竹林は人の生活にとって必要性が失われていき、今では放棄竹林になったものが多い。そのため現在、これらは治水上・環境上で邪魔者扱いされ、河川管理を行う上で伐採されるなどの策が取られている。今後、私たちは水辺の竹林とどのように付き合っていくことが望まれるのか。今回の発表では、付き合い方の一例として、2015年の秋に京都府南部の一級河川木津川で行われた、水辺の竹林を使った竹蛇籠製作プロジェクトについて紹介した。

本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、国土交通省淀川河川事務所が設置した検討会により立ち上げられた。この検討会には、行政関係者や学識者のみならず流域住民団体も含まれ、計画段階から住民参加の形で進められた。検討会において、将来的に土砂供給をした場合の河床環境の保全対策として、竹蛇籠の製作と河岸への試験的な設置が提案された。蛇籠とは、石を中詰めした籠状の構造物のことであり、その素材として竹が用いられているものを竹蛇籠という。

私たち木津川グループ河川レンジャーは、行政と流域住民の橋渡し役を担う存在であり、次世代を担う子どもたちの育成を目指し活動する団体である。本プロジェクトにおいて、私たちは準備(竹蛇籠の材料の竹の伐採・加工)や当日のイベント運営、そして竹蛇籠水制設置後の生き物調査・観察会の運営で大きな役割を担った。イベント当日は、流域住民など170人もの参加により、職人の指導のもと、おおよそ6mの大きさの竹蛇籠を15基製作した。そして、これら蛇籠は水制として河岸に設置された。

成果

竹蛇籠水制を設置した後、私たちは学識者を講師に招き、流域住民や関係者を対象に3度の生物調査・観察会を行ってきた。その結果、水制付近には流水性の生き物のみならず、設置前には見られなかった止水性の生き物も多く採集された。また、蛇籠そのものをすみ場とする生物も見られた。これらの変化は、竹蛇籠水制を設置し蛇籠周辺の物理環境(河床の地形)の多様性が増えたことによって、水生生物にとってのすみ場が多く創出されたためであると考えられる。

今後の展望

本プロジェクト完結までの過程において、竹蛇籠水制が河川生物環境へ及ぼす影響をさらに検討することや、竹蛇籠水制の寿命を知ることが必要となるだろう。そして、河川行政や学識者だけでなく、流域住民(特に小学生世代)が密に関わり続けられることが望まれる。このような場作りの役割を担う存在として、私たち河川レンジャーは今後も関わる予定である。

また、今後、水辺の竹林と付き合う上で、本プロジェクトのような様々な利活用のあり方を模索するとともに、本来の水害防備林としての役割を果たすための管理手法を開発することが望まれる。そのためには、水害防備機能を果たす理想的な稈サイズ・稈密度、そしてそのような竹林に保つための伐採方法について調査研究していく必要があるだろう。